金沢城下における町人の外出行動の空間特性*

Spatial Characteristics of Outdoor Behaviors in the Castle Town of Kanazawa

馬場先　恵子**　淺野　浩子***

By Keiko BABASAKI and Hiroko ASANO

Abstract

Spatial Characteristics of outdoor behaviors at the end of Edo Period are researched by means of a diary of a townsman in the Castle Town of Kanazawa. Private behaviors are mainly analyzed and classified into two types. One is necessary actions which are needed for his society, such as errands and courtesy visits. The other is not necessary actions but for pleasure at his leisure such as shopping, visiting temples, eating with his friends and other recreations. Following characteristics of behaviors at his leisure are cleared: 1) He drops around at many places. 2) He mainly enjoys his leisure in his neighborhood. 3) He goes out for other recreations with his usual leisure as visiting temples or eating houses. 4) Unusual recreations are assorted into following types, that is, seasonal recreations on nature, visiting events of temples or shrines and looking at events of samurai society.

1．はじめに

地方都市において、中心市街地空洞化の問題が議論されるようになって久しい。その主な原因はモータリゼイションの進展に伴う市街地の拡大と、郊外の大型商店の進出により、中心部の集客力が減少したためと考えられる。地方都市中心部の賑わいは、本来は歩いてあらゆる用を足せる利便性にあったといえよう。買物、遊興、飲食等、庶民の「遊び」の場が集積した地区が繁華街として成立していたと考えられる。特に、自動車化以前の日本では移動手段が徒歩に限られ、その範囲内に「遊び」の場を求めていたといえる。

本研究では、中心市街地の「遊び」空間充実の示唆を得るため、近世金沢城下町における町人の外出、特に「遊び」の行動特性や空間特性について考察する。

2．既存研究の整理

中心市街地活性化策の検討を目的に青木[1]は、仙台市の中心市街地と郊外型ショッピングセンターでヒアリング調査を行い、訪問動機について分析している。その結果、中心市街地では訪問場所数が多いこと、滞在時間が長いこと、買物以外の欲求の充足感が高いこと、飲食等の非日常体験や精神充足が訪問の重要な要因であることを示し、活性化の方策を考察している。本研究では、現代の中心市街地活性化策について具体的に考えるものではないが、近世の遊び行動の特徴を分析する際に有用な示唆が得られている。

また、本研究と同様に、近世庶民の日記を資料として、藤井他[2]は江戸繁華街における回遊行動について研究している。この研究では45年間の日記から繁華街への回遊行動を抽出し、行動パターンを分析することにより、当時の主要な繁華街4地域の賑わい要因について考察している。主な目的は繁華街の利用のされ方をみるものであるが、本研究では、庶民の外出行動をすべて抽出することにより、遊び行動と他の外出との関係、日常的な遊びの特徴を解明するものである。その他、江戸の賑わい空間に関する研究として、羽生[3]は江戸の名所について、伝統名所と新興名所の魅力要素と空間特性を調べることにより、名所空間の成立・成熟過程を考察している。また、歴史的史料をもとに吉田[4]は両国橋と広小路について、金行[5]は江戸の寺院境内について、広場としての賑わい空間の様相を述べている。

金沢城下町の遊び空間に関する研究で向井[6]があげられる。向井は、金沢城下町の都市空間を民俗学の視点から分析し、宗教、政治、商業、遊興の文化空間を図示した。また、19世紀の金沢は、「武家によって作り出された城下町」を「民衆が自分たちの都合に合ったようにうまく使いこなした時代」と述べている[7]。丸山[8]は、名所案内・錦絵・地誌・日記をもとに、藩政期、明治期の名所、年中行事の分析から遊び空間を論じている。特に、名所案内を用いた金沢名所の分析や、日記・地誌を用いた年中行事や芸能・文化など余暇生活の分析を行い、

*keyword：藩末期、外出行動、遊び

**正会員 博(学) 金沢学院大学美術文化学部文化財学科

***金沢学院大学美術文化学部文化財学科 15年度卒業生

（〒920-1390　石川県金沢市末町10）

遊び空間分布を図示している。そこでは多くの遊び空間は「季節と密接な関係をもっており」、「寺社、遊郭、飲食店などが補完的に存在しているのが特徴である」と述べている[9]。丸山の研究の特徴は、当事の金沢の代表的な遊び空間の分布を示しており、特に遊びの内容が豊富になった明治期の主要な遊びの場が把握されている。しかし、こうした研究では、花見や芝居見物など一般に親しまれている名所における遊びや、名所空間の特徴を対象としており、遊び行動における自宅からの行き易さ、親しみ易さなど、トリップ距離や地理的要因を考慮した行動特性を分析したものではない。また、散策など人々の日常的な遊びの研究はなされていない。

本研究では個人の日記を用いることから、パーソン・トリップ調査と同様のデータが得られるため、より詳しいトリップ特性の分析が可能と考えられる。さらに、目的地の賑わいの様子などの記述もあることから、当時の遊びの特性について、これまでと違った視点から捉えることができると考えた。そこで、1 年間の日常の外出行動をすべて抽出することにより、外出の種類による場所の特性を分析し、また、日常的な遊びと他の行動との関わりなどから、当時の庶民の遊び行動の特徴について考察する。

3．研究の方法

本研究では『梅田日記』[10] を用いて外出記事を抽出・整理した。若林の解説[11] によれば、『梅田日記』は、近世末期の金沢城下町の町人梅田甚三久によって書かれた日記で、うち、現存しているものは 1864（元治元）年 6 月から 1867（慶応 3）年正月までのものである。甚三久の職業は番代手伝といい、農政関係の下級書記官で書類の調整などに携わっていた。日記は私用のものであるが、仕事に関する記事が多く、役所（算用場）での執務事項、上司である番代や十村[12] たち[(1)]との公私にわたる交流が主体となっている。また、住居は、『日記』の内容に「川向ヒ崎田小左衛門様御隣リ前田様御長屋燃上リ」とあり、浅野川畔の大橋近くに住んでいたと考えられる[13]。

表 1 は現存する 3.5 年間の記載日数を示している。外出の記事が書かれていた日数は、1 年目の 237 日に比べ 2 年目 11 日、3 年目 0 日、4 年目 3 日と 2 年目以降の外出の記述は極めて少ない。外出以外の記事の多くは、職務内容や政治情勢などの覚書である。本研究では、詳細な記述がされている 1864 年 6 月 15 日から翌年 5 月 18 日までの 329 日間を対象とする。5 月 18 日以降は閏 5 月 27 日まで記載がなく、それ以降の記述が激減することから、上記の約 1 年間を対象とすることにより、年間を通した外出行動の特性なども分析できると考えた。この期間で日記が書かれていた日数は 289 日である。外出では、金沢城下や郊外への日帰りの外出と、数日間に及ぶ越中高宮村や山中温泉[14] への旅行があるが、対象を金沢およびその近郊に限定するため、遠方への旅行は分析対象から除外した。外出の記事が書かれている 237 日のうち、旅行期間を除くと外出日数は 215 日となる。日記の特性として、必ずしも毎日の行動をすべて記述したものとはいえないが、些細な用事の外出も記載されており、かなり多くの情報を得られるデータと判断した。外出行動をすべて抽出した結果、568 件抽出された。

表1　日記記載日数

	1年目	2年目	3年目	4年目
記載日数	289	62	14	7
外出記述日数	237	11	0	3
私事外出日数	155	9	0	2

表2　外出目的の分類

目的		内容
仕事	仕事	番代手伝としての職務
	挨拶	十村の出府・帰村の挨拶
私事	用事	依頼、取立て、借用、手伝い等
	挨拶	見舞、中元・歳暮、年賀、土産等
	儀礼	冠婚葬祭、寄合等
	入浴	風呂
	娯楽	見物・聞物、散策、遊戯等
	飲食	飲酒、飲食、宴会等
	参詣	参詣、開帳、法恩講等
	買物	買物、注文、支払い等
計		

それぞれの外出に関して抽出した指標は、月日、天気、目的地町名、目的地施設、外出目的、同行の有無、立寄り回数、目的地と自宅間の距離（1999 年版国土地理院数値地図で計測）である。これらのデータをもとに外出目的と各指標との関係を分析した。

外出目的については、表 2 のように分類した。大きく仕事と私事に分けられる。「仕事」は役所や上司宅での仕事であり、「仕事上の挨拶」は上司への挨拶である。私事は表の 8 項目に分類した。「用事」の内容は表記のように多種多様であるが、私事の用件遂行のために生じた訪問である。また、特に目的の記述が無く、ちょっと立寄った場合も「用事」に含めた。つまり、人を訪ねることが主目的であり、その人との間で生じた用件遂行のために生じた外出である。「私事挨拶」については、季節の挨拶など、人との付き合いを目的とした訪問である。「儀礼」については冠婚葬祭の他に組合の寄合も含め、出席が必要とされる訪問とした。「入浴」の記述は頻繁にあるが、9 件 5 町の入浴以外ほとんど町名の記述がない。「娯楽」は室内外の遊戯、見物のほか、自然やまちなかの散策が含まれる。また、連れとの待ち合わせや別れの場、通過地点など、散策途中で記載された地点・町名もひとつの目的地とした。「参詣」に関して、開帳などは寺社の催しであり「娯楽」の見物目的ともみなせるため、日記の中で「参詣」と記述があったもののみを別に分類した。

用事・挨拶・儀礼は、訪問先の人物との付き合い上生じた訪問である。私事外出には、用事や儀礼、生活習慣（入浴）など必要性を伴った外出と、必要性をあまり持たないが生活に楽しみや潤いを持たせるための外出に分けられる。後者の種類の外出が、娯楽、飲食、参詣、買物であり、これらの目的を改めて「遊び」と定義した。

4．分析結果

（1）外出目的と外出先施設（表 3）

表3 目的別にみた外出先施設

		個人宅	役所	旅館	風呂	寺社	飲食店	商店	山	他	計
仕事	仕事	17	127	6						1	151
	%	11.3	84.1	4.0						0.7	100
	挨拶	2		55							57
	%	3.5		96.5							100
私事	用事	91		5		1		1		1	99
	%	91.9		5.1		1.0		1.0		1.0	100
	挨拶	42		10							52
	%	80.8		19.2							100
	儀礼	15		1		7					23
	%	65.2		4.3		30.4					100
	入浴				57						57
	%				100						100
	娯楽	10				10		4	7	16	47
	%	21.3				21.3		8.5	14.9	34.0	100
	飲食	20		1		1	17		1		40
	%	50.0		2.5		2.5	42.5		2.5		100
	参詣					32					32
	%					100					100
	買物	2						8			10
	%	20.0						80.0			100
計		199	127	78	57	51	17	13	8	18	568
	%	35.0	22.4	13.7	10.0	9.0	3.0	2.3	1.4	3.2	100

外出目的の件数は、「仕事（仕事・挨拶）」で208件、37%を占める。私事で最も多いのは「用事」で99件(17%)、次いで「入浴」57件（10%）、「挨拶」52件（9%）、「娯楽」47件（8%）である。用事・挨拶・儀礼で私事外出360件中174件と約半数を占めている。特に用事・挨拶は、現代では通信技術やサービス産業の発達や生活習慣の変化により、発生しなくなったものが多いと考えられる。同様に入浴も住宅構造の変化によりほとんど発生しなくなった。

外出先の施設については、個人宅が199件（35%）と最も多い。次いで役所127件（22%）、旅館78件（14%）風呂57件（10%）である。目的別にみると、役所はすべて仕事を目的としたものである。また、仕事の挨拶では旅館（97%）、私事の用事や挨拶では個人宅（92%、81%）の割合が高い。儀礼では葬儀など用件の特性上、個人宅（65%）のほかに寺社（30%）の割合も高い。前述のように、私事の用事・挨拶・儀礼については、対人関係が目的となるため訪問先も個人宅が多い。また、個人宅の場合、日記の記事では訪問先で「ちょっと一杯」といった飲食を伴う場合が多いが、訪問の目的として飲食ではなく他の目的が明記されていた場合は、その目的に従った。遊び目的の外出先は、飲食では個人宅50%、飲食店43%、参詣では寺社100%、買物では商店80%と施設が限られる。一方、娯楽は「その他」が34%と最も多く、次いで個人宅（21%）、寺社（21%）、山（15%）である。「その他」は散策や見物、待ち合わせなどの地点や町名であり、施設が限定されていない。

（2）年間を通した外出行動の特性

表4, 5は私事目的、遊び目的で外出した日数を天気・月別にみたものである。天気の記載があった日について、雨・雪が降った日とそれ以外に分けて集計した。表6は目的・月別にみた外出日数である。同一目的で1日に複数回外出しても1日として集計している。データは6月から翌年5月までのものであるが、1月から表記した。また、日記のデータが6月15日から5月18日までの期間のため他の月より日数が少ないこと、2月には9日間、4月には3日間、10月には10日間の旅行[14]のため不在となっていることを考慮に入れる必要がある。

1年を通した外出日数について、私事目的の外出日数では（表4）、3月が22日、1月が21日と多く、7月、8月がそれぞれ7日と少ない。表6の目的別にみるように、7, 8月には「用事」、「挨拶」、「入浴」といった遊び以外の目的で他の月より外出日数が少ないことによる。一方、遊び目的では（表5）、3月が12日と多く、次いで4月と9月が8日、11・12月が7日で、春・秋の行楽期にやや多い傾向がみられるが、大きな差はみられず毎月数日の遊び外出が発生している。目的別に外出日数の多い月をみると（表6）、「用事」で3月が14日、挨拶は1月が10日と多い。挨拶が1月に多いのは年始の挨拶回りの外出が多いためである。「入浴」では寒い時期に外出日数が多い。遊びに関しては、「飲食」が3月に9日と多いが、それ以外では大きな差はみられない。

天気については月によって雨・雪の日数が異なるため、外出傾向全般に関して分析することはできないが、私事目的全体（表4）と遊び目的（表5）で天気の割合を比較した。3・5・11・12月以外の月では遊び目的の方が私事目的より「曇・晴」の割合が高い。一般に、必要性を伴う場合、天気にかかわらず外出せざるを得ないが、必要性を伴わない遊び目的では、天気が悪いと外出を控えると考えられる。3月は「飲食」の日数が多く、また、3・5・11・12月に遊び目的の方が「雨・雪」の割合が高いのは、行楽の季節も含まれるが、日記を見る限り特に明確な理由は考えられない。

以上、年間を通した外出行動の特性については、挨拶、入浴目的で季節との関係がみられ、また、遊び目的で春・秋の行楽期にやや多い傾向がみられたが、特に明確な特徴は見出せなかった。天気についても遊び目的の方が、天気のよい日にやや多く外出する傾向はみられたが、明

表4 天気と私事外出日数

月	曇・晴	雨・雪	計	不明	総日数
1月	10	11	21		21
%	47.6	52.4	100		
2月	10	5	15		15
%	66.7	33.3	100		
3月	12	9	21	1	22
%	57.1	42.9	100		
4月	8	4	12	4	16
%	66.7	33.3	100		
5月	11	3	14		14
%	78.6	21.4	100		
6月	3	2	5		5
%	60.0	40.0	100		
7月	4	2	6	1	7
%	66.7	33.3	100		
8月	4	3	7		7
%	57.1	42.9	100		
9月	7	5	12	1	13
%	58.3	41.7	100		
10月	7	3	10		10
%	70.0	30.0	100		
11月	4	9	13		13
%	30.8	69.2	100		
12月	5	7	12		12
%	41.7	58.3	100		
計	85	63	148	7	155
%	57.4	42.6	100		

表5 天気と遊び外出日数

月	曇・晴	雨・雪	計	不明	総日数
1月	3	2	5		5
%	60.0	40.0	100		
2月	5	1	6		6
%	83.3	16.7	100		
3月	6	6	12		12
%	50.0	50.0	100		
4月	4	1	5	3	8
%	80.0	20.0	100		
5月	4	2	6		6
%	66.7	33.3	100		
6月	2	1	3		3
%	66.7	33.3	100		
7月	3	1	4	1	5
%	75.0	25.0	100		
8月	3	2	5		5
%	60.0	40.0	100		
9月	5	2	7	1	8
%	71.4	28.6	100		
10月	5	1	6		6
%	83.3	16.7	100		
11月	2	5	7		7
%	28.6	71.4	100		
12月	2	5	7		7
%	28.6	71.4	100		
計	44	29	73	5	78
%	60.3	39.7	100		

表6 月別にみた私事外出日数

月	用事	挨拶	儀礼	入浴	娯楽	飲食	参詣	買物
1	7	10	2	10	3	3	1	0
2	8	3	1	7	2	3	3	2
3	14	6	0	7	3	9	4	2
4	6	4	2	5	3	4	3	0
5	8	3	2	7	4	3	2	0
6	0	2	0	0	1	0	1	1
7	0	2	2	1	1	2	2	0
8	1	1	4	2	2	2	2	0
9	2	2	2	5	4	2	5	1
10	7	0	1	5	2	3	1	1
11	9	4	2	2	0	4	2	1
12	4	1	2	6	2	2	2	1
計	66	38	20	57	27	37	28	9

確な関連性はみられない。

（3）外出時の同行

図1は外出時の同行者の有無を目的別にみたものである。仕事では99%、私事挨拶で96%が一人で行った外出であり、その他、仕事挨拶、用事、儀礼、買物で約9割、入浴でも約8割と単独の外出が大部分を占める。一方、娯楽では34%、飲食は50%と単独の割合が低く、半数以上が妻または友人と連れ立っての外出となっている。特に、外出先施設の個人・旅館を除いた場合、娯楽の76%、飲食の90%が同行しての外出であった。このように、飲食店での飲食や、個人宅以外での娯楽には、家族や友人とともに外出する場合が多い。

（4）立寄り行動

外出特性のひとつの指標として「立寄り回数」を定義した。すなわち立寄り回数1回の場合、自宅と訪問先1箇所との往復である。また一回の外出で複数箇所訪問している場合、その訪問箇所数が立寄り回数となる。自宅から出発して自宅に戻るまでの数としたので、仕事先からの立寄りの場合も自宅からの回数で示している。表7は1回の外出時の立寄り回数である。立寄り回数1回のみが最も多く65%を占め、2回以下の立寄りで88%を占める。1回の外出中に遊びを含む場合、立寄り回数は1回が51%と全体に比べて少なく、2回以上の立寄りが多い。

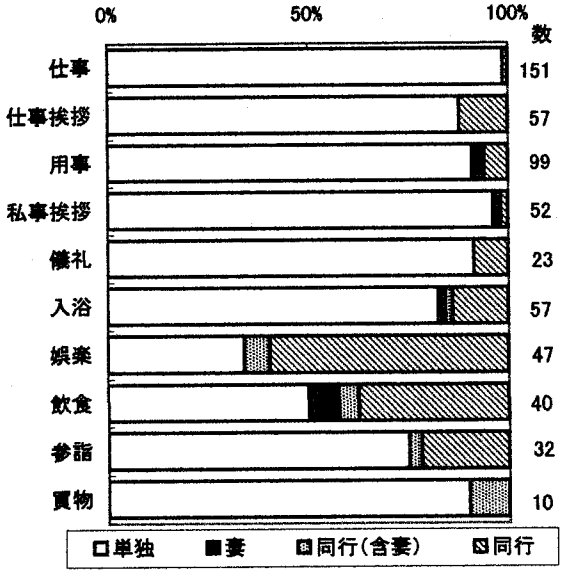

図1 目的別同行者の有無

表7 外出時の立寄り回数

	全数	%	遊び	%
1回	232	65.0	44	50.6
2回	82	23.0	26	29.9
3回	21	5.9	5	5.7
4回	13	3.6	5	5.7
5回	4	1.1	3	3.4
6回	2	0.6	1	1.1
7回	1	0.3	1	1.1
8回	1	0.3	1	1.1
10回	1	0.3	1	1.1
計	357	100	87	100

図2は外出目的との関係を示している。立寄り回数は、

その目的が含まれる外出の総立寄り回数を示す。立寄り回数1回の割合が半数以上を占めるのは入浴（68%）、仕事（54%）、儀礼（52%）、買物（50%）であり、これらの目的を含む外出では9割以上が3回以下の立寄りである。これは目的のはっきりした外出であり、ついでに立寄るものではないためと考えられる。立寄り回数1回の割合が少ないのは、私事挨拶（21%）、娯楽（23%）、仕事挨拶（26%）、用事（29%）である。挨拶では、一度に複数の上司宿所や知人宅に出向いており、用事も外出ついでに個人宅への立寄りが多く、単独の外出とはなりにくい。7回以上と特に立寄り回数が多いのは娯楽（28%）、飲食（13%）、参詣（10%）であり、これらは同一の外出の中に含まれているものが多い。

遊び目的の外出について、それぞれの目的に伴う他の目的を調べた（表8）。どこにも立寄らない単一目的の外出はそれぞれの目的で一定割合を占め、遊びを伴う全外出数（85件）の約半数（44件）を占めているが、残り半数は他の目的を伴っている。最も多い目的は、その他（遊び以外）であるが、仕事帰りの遊び、出勤途中の見物、遊び途中の用事の訪問などである。複数の遊びが伴う場合、最も多い目的が、娯楽と娯楽、娯楽と飲食（各9件）、次いで飲食と参詣（6件）であり、飲食を伴う遊びが多い。

（5）飲食・娯楽の内容

飲食目的について、目的施設が個人宅以外の記事の一覧を表9に示す。19件中、一人で外出したのは、仕事帰りの食事（7月6日）と大晦日の晦日蕎麦（12月29日）のみであり、その他はすべて連れと共に訪れている。また、他の目的をもたず飲食のみを目的とした外出は、3度の晦日蕎麦以外には、新町の料理屋での酒宴（11月7日）と蓮如忌の寺を借り切っての宴会（3月25日）で、その他14件は参詣や娯楽、買物目的を伴っている。飲食は記載された数も多いとはいえず、表をみる限り特定の飲食店を利用しているとはいえない。甚三久の場合、飲食店にそれほど頻繁に出入りしていたわけではなく、友人と遊びに出るときに多く利用し、それ以外は表3に示すように個人宅で飲食している。また、晦日蕎麦は10・12・2月の記述があるが、現代のように12月に限らず月末に食べる習慣があったと考えられる。

表10に娯楽の内容と利用施設を示す。寺社や武士行事、事件などの「見物・聞物」（23件、49%）と「屋外散策」（17件、36%）、「室内遊戯」（7件、15%）に大別される。施設との関係で最も多いのは寺社の催事の見物（9件）であり、その他の施設では、個人宅での室内遊戯（7件）、事件の見物（6件）、まち散策（6件）、山の散策（6件）である。室内遊戯では、友人宅で碁や将棋を打っている。事件の見物は出勤時や、友人宅への訪問時などに罪人の引き回しや火事に遭遇した時の見物であり、すべて同行

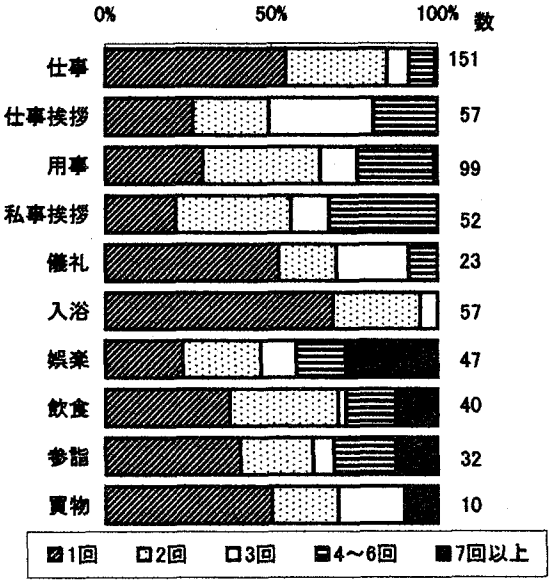

図2 目的別外出時の立寄り回数

表8 遊び目的の外出に伴う他の目的

	娯楽	飲食	参詣	買物
単一目的	11	15	13	5
娯楽	9	—	—	—
飲食	9	2	—	—
参詣	4	6	2	—
買物	1	1	1	1
他	11	15	15	4

個人・旅館施設を含む

表9 飲食時の利用施設と内容（個人・旅館を除く）

月日	地域	町名	場所	立寄り	同行	内容
7月6日		（不明）	伏かさ	有	無	仕事帰りに飲酒、飲食
8月26日	城北	主計町	蕎麦屋	有	友人1人	友人と風呂帰りに立寄る
9月7日	川北	木町	小料理屋	有	友人1人	参詣・山歩きの帰りに立寄る
9月7日	川北	愛宕一番町	小松屋	有	友人1人	料理屋のはしご、芸者と大騒ぎ
9月10日	川北	卯辰山麓	茶屋	有	友人2人	参詣後の山歩き、茶屋で知人に呼び止められ一杯
10月29日	城東	懸け作り	蕎麦屋	無	友人1人	晦日蕎麦
11月7日	城北	新町	和泉屋	無	友人2人	友人に誘われ酒宴
11月9日	城北	博労町	六分店	有	友人1人	仕事挨拶帰りに立寄った友人と出かける
12月29日	城北	主計町	蕎麦屋	無		晦日蕎麦
1月11日	城北	母衣町	蕎麦屋	有	妻と友人4人	煙草屋に軍談を聞きに行った帰りに立寄る
1月20日	川北	木町	六分店	有	友人1人	煙草屋に軍談を聞きに行った帰りに立寄る
2月15日	川北	観音町	小松屋	有	妻と友人3人	参詣・山歩きの帰りに立寄る
2月29日	城北	母衣町	蕎麦屋	無	妻	晦日蕎麦
3月7日	川北	卯辰山	一本松	有	友人数人	交菜摘み・花見の後、野宴
3月25日	川北	卯辰山麓	龍国寺	無	妻と友人多数	蓮如忌。大風雨のため寺を借り大宴会
3月27日	川北	卯辰山麓	雲錦楼	有	友人6人	参詣後の宴会
3月27日	川北	愛宕町	珍席	有	友人6人	料理屋のはしご
5月11日	川南	寺町	鍔屋	有	友人2人	まち中を見物・散策後宴会
5月11日	城西	南町	松本屋	有	友人2人	帰り道の菓子屋でお茶

の記述はない。それ以外の娯楽ではほとんどが友人と連れ立って出かけている。特に寺社では謡や能、相撲、花揃えと多くの催しが行われており、日記にも「見物人近年稀なる群集之事」との記述[15]がみられる。また、武士行事では、調練や藩主の帰城行列の見物、節句に掲げる幟の見物などに出かけている。調練見物時にも「見物人も夥敷事」の記述[16]がある。このように寺社の催しや武家社会の行事の見物は、当時の金沢の庶民の楽しみであったと考えられる。自然散策は祭りの参詣や茸狩り、交り菜摘みの時に、卯辰山の庚申塚や一本松などを訪れている。近世後期の絵図[17]には一本松の絵が描き込まれており、天保期の『金沢八景』でも挙げられている[18][19]。また、庚申塚についても『浅野川八景』の掛物に描かれており、卯辰山頂上の茶臼山にあった庚申堂の名残りという[20]。「丸山江上り尾張丁等町中一見致し」との記述[21]のように眺望を楽しんでいた。まち散策では、遊び目的で町なかを遠出した時の待ち合わせや別れた場所、通り道の町名などの記述である。

娯楽の特徴として、個人宅での室内遊戯以外の主な目的は、茸狩りなど「自然・季節との関わり」、「寺社の催事」、調練や行列など「武士社会の行事の見物」であり、付随する遊びとして友人との「自然や町並みの眺望」、「町や山の散策」があげられる。これらの主な目的は、前述の向[7]の「武家によって作り出された城下町」で「民衆が自分たちの都合に合ったように使いこなした」娯楽、丸山[9]の「季節と密接な関係をもった」娯楽を含むものである。さらに本研究では、こうした娯楽の多くが、友人や家族と連れ立って山や町を歩き回りながら、飲食や参詣など他の遊びとともに行われていることが示された。

（6）地理的特性

日記中、外出先について、町名を記したもの、橋上など場所を示したもの、前後の記事から地域が類推できるものを抽出した。また、自宅と役所、寺社の位置を特定した。それ以外の施設は、町名は判別できるが位置が特定できないため、町の中心部を代表地点とした。さらに、町名が特定できず地域のみ判別できるデータは、地域別の分析のみで用いている。また、旅館・個人宅の町名が不明のものが多いことに加え、ここでは遊び目的で利用される施設・地域の特性分析が目的であり、また、個人宅は交友関係から生じた目的地であり遊びの目的地としての地域特性を示すものではないことから、以後の「遊び」の分析では、個人宅・旅館を除いたデータ96件（表3の二重線で囲まれたデータ）を用いている。

a）私事外出

私事外出について判明した地域・位置を図3・表11に示す。両川に挟まれた城下の町について、城を中心に北

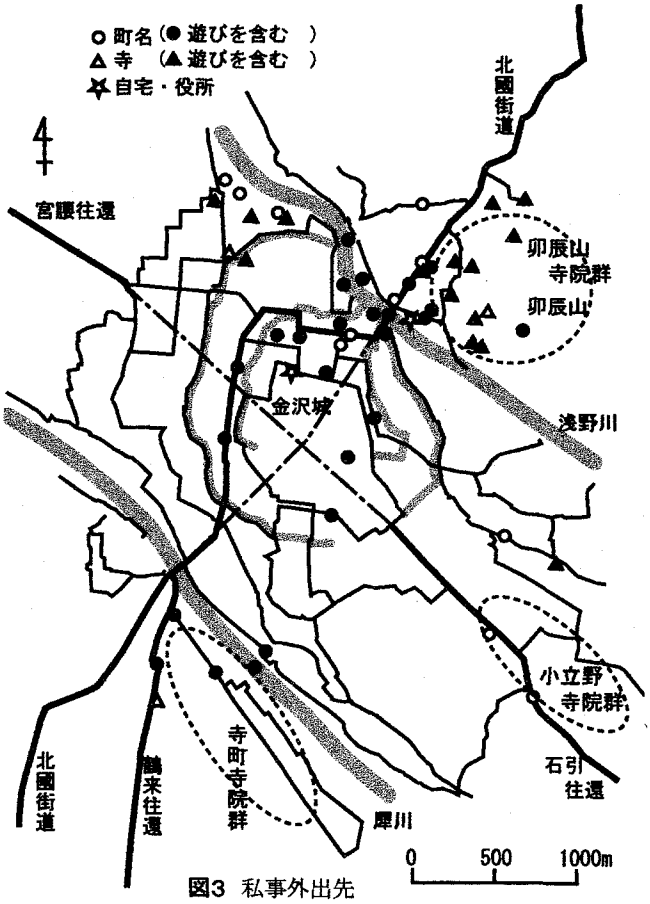

図3 私事外出先

表10 娯楽の内容と外出先施設

内容		個人宅	寺社	商店	山	他	計	%
見物闘物	寺社催事(謡、相撲、花揃)		9				9	19.1
	事件(火事、処刑等)					6	6	12.8
	武士行事(行列、調練等)	1				3	4	8.5
	花屋見物・軍談闘物			4			4	8.5
屋外散策	まち散策(町歩き、待合せ)	1	1			6	8	17.0
	自然散策(山歩き・眺望等)				6		6	12.8
	自然遊戯(茸狩、舟遊び)	1			1	1	3	6.4
室内遊戯(碁、将棋等)		7					7	14.9
計		10	10	4	7	16	47	100

表11 私事外出先地域

	私事	%	遊び	%
川北	140	57.1	60	63.8
城北	74	30.2	16	17.0
城東	10	4.1	7	7.4
城南	7	2.9	3	3.2
城西	2	0.8	1	1.1
川南	10	4.1	6	6.4
郊外	2	0.8	1	1.1
計	245	100	94	100

遊びは個人・旅館を除く

表12 遊びの目的別にみた外出先地域（個人・旅館を除く）

	娯楽	%	飲食	%	参詣	%	買物	%	計	%
川北	19	51.4	9	50.0	28	87.5	4	57.1	60	63.8
城北	5	13.5	6	33.3	3	9.4	2	28.6	16	17.0
城東	4	10.8	1	5.6	1	3.1	1	14.3	7	7.4
城南	3	8.1							3	3.2
城西			1	5.6					1	1.1
川南	5	13.5	1	5.6					6	6.4
郊外	1	2.7							1	1.1
計	37	100	18	100	32	100	7	100	94	100

國街道、石引往還、宮腰往還で4地域に分け、城北、城東、城南、城西とし、さらに浅野川以北（川北）、犀川以南（川南）、郊外を加えた7地域に分類した。私事目的で地域が特定できたデータとして245件抽出されたが、そのうちの140件（57%）が川北、74件（30%）が城北と、この2地域で9割近くを占める。特に「遊び」目的では、川北が60件（64%）、城北が16件（17%）と8割近くが2地域で占められる。すなわち、外出先は自宅近辺に集中しており、浅野川以南でも、図3に示すように多くの外出先は北國街道より北側に多い。北國街道には北部の浅野川大橋と東内総構堀枯木橋、南部の西外総構堀香林坊橋と犀川大橋に橋番所がある[22]。また、街道から路地への入り口には夜間の出入りを禁じる木戸が建てられていた。橋番所・木戸を回避して到達できる地域が選ばれている可能性が考えられる。

b）遊び

表12は「遊び」の目的別地域の分布である。4つの目的とも半数以上の外出先が川北であり、特に参詣では、32件中28件（88%）が浅野川以北に集中している。城北も含めると参詣の97%、買物の86%、飲食の83%、娯楽の70%を占め、自宅の周辺地域に集中していることを示している。一方、娯楽では城南や川南、郊外も9件（24%）みられ、比較的遠方まで外出しているといえる。

娯楽目的の場合、最も多く利用されているのは卯辰山と寺院群がある川北（19件、51%）であるが、その他、城北や城周囲、犀川上流の一文橋、犀川南の寺町近辺とかなり遠方まで出かけている。主な内容は、浅野川以北では卯辰山への茸狩りや散策ついでの風景見物、近所のタバコ屋での軍談聞物、寺社での謡・相撲見物、火事や処刑者の引き回し・帰城行列見物など、城北では東西末寺の花揃え見物、城東では殺人現場の見物などがある。遠方では城南の本多家（藩重臣）ののぼり見物や、川南の犀川沿いのごり屋の見物と屋形舟遊覧、藩の調練見物、郊外では能見物などであった。

参詣はほとんどが卯辰山周辺に集中しているが、これは藩の政策により卯辰山寺院群に真宗以外の寺院を集めたためである。しかし甚三久自身は真宗信者である。また、同様の政策によって集められた犀川以南の寺町寺院群や城東の小立野寺院群への参詣は行われていない。すなわち宗派に関係なく身近の寺社に参詣していることになる。また、飲食では川北の卯辰山麓や城北の浅野川沿いの飲食店を利用することが多い。表9にあるように、木町、愛宕町、観音町を含む卯辰山麓では宴会を開き、主計町、懸け作り、母衣町の浅野川沿いでは蕎麦屋を利用している。

浅野川には荷揚場があり、人々が集まる場であった。浅野川近辺は水運と卯辰山寺院群により、犀川近辺は水運と寺町寺院群により、小立野口では小立野寺院群により、料理屋や茶屋・娼家の多い地域であった。川北の愛宕町・木町、城北の母衣町・主計町もそのような町であった。特に愛宕町は1820～1831年の時期、「東の遊郭」

表13　寺社への外出目的と地域

地域	寺社名	参詣	娯楽	飲食	計
川北	観音院	13	2		15
	来教寺	9			9
	春日社		2		2
	善導寺	1	1		2
	龍国寺	1		1	2
	久保市山乙劔宮	1			1
	即願寺	1			1
	多門天社	1			1
	長谷山市姫宮	1			1
	本然寺		1		1
城北	瓢箪町天満宮	2			2
	西末寺		2		2
	鍛冶町八幡宮	1			1
	東末寺		1		1
城東	田井天満宮	1			1
郊外	大野湊神社		1		1
計		32	10	1	43

として、犀川南の「西の遊郭」とともに公許されていた地区であり、それ以後も茶屋街として続いた。1867年には遊郭も復活し1871に廃止された[23)24)25)]。このように、金沢には寺院群を核とした賑わいの場が複数箇所存在していたが、甚三久の場合、自宅近くの盛り場を専ら利用していた。

寺社名の記述があったものについて遊びの目的別に表13に示す。記載されていた寺社は16社あり、ほとんどが川北または城北の寺社である。参詣では観音院と来教寺がそれぞれ13件、9件と特に多い。甚三久は、ほとんど毎月10日に来教寺[26]、18日に観音院[27]に参詣するのを習慣としていた[(2)]。それ以外の日やその他の寺社への参詣は、開帳や祭礼の場合が多く、家族や友人と連れ立って出かけている。浅野川以南の参詣では、役所の帰りに天満宮（田井、瓢箪町）に参拝したり、友人宅へ寄るついでの参拝がある。観音院は加賀藩歴代藩主の保護を受けており、卯辰山麓寺院群の代表格の真言宗寺院[28]である。十一面観音を祀り宗派に関係なく参拝者が多かった[29]。また、甚三久の得意とする謡がよく催されている所でもある。来教寺は天台律宗であるが[30]金毘羅くじうけが行われており、甚三久も病気の時には妻に行かせるほど熱心であった[31]。このように参詣は日常的な楽しみといえ、それ故通いやすい寺社が参詣の対象になったといえる。浅野川以北の寺社に集中しているのは、橋を渡らず気軽に行くことができ、さらに、謡、くじ受けなど魅力的な誘因をもつ寺社が参詣の対象になったと考えられる。

一方、東西末寺の宗派は真宗であるが、「西東両末寺御花揃為見物」とあり[32]、「参詣」の記述はない。娯楽の目的地であり、日常的な参詣では訪れていない。「祭り」はあらかじめ決められた日時に行われ人々の参詣を促し、その日になると出店、見せ物などが並び、非日常の遊びの場としても利用されていた。卯辰山麓以外の寺院群[33]でも祭りや催事は行われていた[(3)]が、遠方まで行かずとも自宅近くで行われる種々の催事を楽しんでいたと思われる。

以上のように、寺社への外出は、日常的な参詣と、非日常的な催事の参詣・見物が主な目的であり、庶民の楽

しみの場として利用されていた。

c）外出先距離特性

外出先施設の町名や位置が特定できる記事について自宅からの距離を調べた(図4)。目的地が卯辰山の場合、散策目的のために場所が特定できず、データから除いている。私事外出の場合、自宅から目的地までの距離が200～300mの場合が最も多く58件(25%)、次いで300～400mが53件（23%）で、500m以内で173件（76%）を占め、それ以上の距離になると件数が激減している。すべてが自宅を出発地としたトリップではないが、その目的地は自宅から徒歩数分以内の場所が多いことを示している。個人宅を除いた「遊び」では、300～400mが24件（29%）と最も多く、500m以内で51件（62%）を占めるが、一方、1000m以上で16件（19%）、そのうち2000m以上が7件（9%）と遠方の外出もみられる。遊びの目的別の平均距離は、娯楽で987mと長いが、参詣は517m、飲食は503m、買物は378mであった。

d）遊びの回遊行動

図2で示したように、遊び、特に娯楽では1回の外出で多くの場所に立寄っている。表14は立寄り回数が4回以上で遊び目的を含む外出を抽出したものである。特に娯楽目的の場合はその内容を記している。5月11日の外出を除き、ほとんどの遊びが川北、または城北で行われている。その他の地域の遊びは遊び以外の目的で外出したついでに行われている。これは遊びの多くが自宅近辺で行われていることを示しており、5月11日の遊びは、特別な日の遊びと考えられる。

そこで立寄り回数の多い遊び外出で特徴的な、遠方まで外出した記事と自宅近辺の記事の2件に着目した（表15)。またそのコースを図5に示す。9月7日は、卯辰山麓の4社で祭礼が行われている時期である。うち3社の参詣を兼ねて、仕事の帰りに友人とともに遊びに出かけている。夕方から参詣や山（庚申塚、一本松）で景色を眺めた後、夜には近所の茶屋で宴会を開き翌2時に帰宅している。名所見物や祭礼時の参詣は庶民の娯楽の定番であったと考えられる。それぞれの目的地間の距離を求め、外出の総距離を概算した。その結果、朝に自宅から役所を経由して自宅に戻るまでの距離は3990m、夕方に役所から出発して自宅までの距離だけをみると3270mである。

5月11日は最も遠くまで行楽に出かけた事例である。城の東側から南下し、城西側を通って帰宅している。内容をみると、15時頃に近所の知人宅で藩主の帰城行列を見物した後、友人と連れ立って犀川上流まで出かけてい

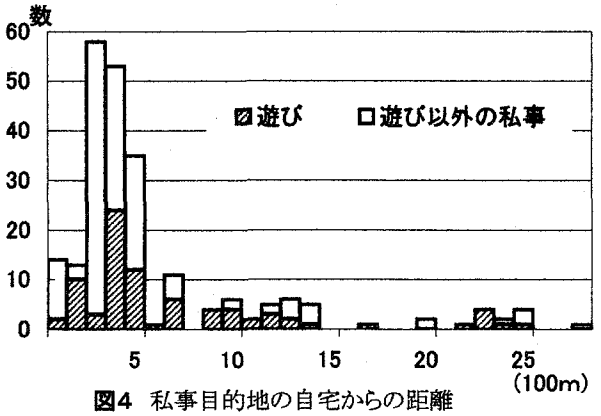

図4 私事目的地の自宅からの距離
（山・郊外を除く）

表14 遊び目的を含む外出の立寄り内容

日	立寄順	立寄数	地域	施設 寺社・飲食店・商店・山・他	施設 個人宅・役所・旅館・風呂	目的 遊び（娯楽内容）	目的 遊び以外
5月11日	1	10	川北		個人宅	(見物)	
	2		城東	他		(散策)	
	3		城東	他		(散策)	
	4		城南	他		(散策)	
	5		城南	他		(散策)	
	6		川南	商店		(見物)	
	7		川南	他		(散策)	
	8		川南	商店		(見物)	
	9		川南	飲食店		飲食	
	10		城西	飲食店		飲食	
9月7日	1	8	城北		役所		仕事
	2		川北	寺社		参詣	
	3		川北	寺社		参詣	
	4		川北	山		(散策)	
	5		川北	山		(散策)	
	6		川北	寺社		参詣	
	7		川北	飲食店		飲食	
	8		川北	飲食店		飲食	
2月15日	1	7	川北	寺社		参詣	
	2		川北	山		(散策)	
	3		川北	山		(散策)	
	4		川北	商店		買物	
	5		不明		個人宅		用事
	6		川北	飲食店		飲食	
	7		川北	他		(散策)	
9月10日	1	6	城北		役所		仕事
	2		川北	寺社		参詣	
	3		川北	山		(散策)	
	4		川北	飲食店		飲食	
	5		川北	山		(散策)	
	6		川北	寺社		参詣	
3月27日	1	5	川北	寺社			用事
	2		川北	寺社		参詣	
	3		川北	寺社		(散策)	
	4		川北	飲食店		飲食	
	5		川北	飲食店		飲食	
5月5日	1	5	城南	他		(見物)	
	2		不明		個人宅		用事
	3		不明		個人宅	(将棋)	
	4		城北		個人宅		用事
	5		城北		個人宅	(散策)	
7月6日	1	5	不明		個人宅		仕事
	2		城北		役所		仕事
	3		不明	他			仕事
	4		不明	飲食店		飲食	
	5		不明		旅館		仕事挨拶
2月17日	1	4	川北	商店			用事
	2		川北		個人宅		用事
	3		川北		個人宅		用事
	4		川北	他		(見物)	
2月25日	1	4	城北	寺社		参詣	
	2		城北		個人宅		挨拶
	3		城北		個人宅		用事
	4		川北		個人宅	飲食	
7月10日	1	4	城北		役所		仕事
	2		不明		旅館		挨拶
	3		不明		個人宅		仕事
	4		川北	寺社		参詣	
8月25日	1	4	城北		役所		仕事
	2		城東	寺社		参詣	
	3		城東		個人宅		用事
	4		不明		個人宅		挨拶
11月19日	1	4	川北		個人宅		用事
	2		川北		個人宅		挨拶
	3		川北		個人宅	飲食	
	4		川北		個人宅		用事

る。途中、味噌蔵町（武家地）、百間堀（城周囲）、本多家中を通り、犀川上の武家屋敷前で一人と別れている。これらの地点は通過地点としての記述のみである。北國街道を通らず城東を歩いており、武家地や城近辺も回遊ルートとして使われていることになる。犀川では大橋上流の一文橋を渡り、近辺のごり屋見物、屋形舟を楽しみ、花屋見物などしながら最後は料理屋で一杯酌み交わし、街道沿いの南町で茶菓をとった後、0時に帰宅している。総トリップ距離は約5850mとなり、実際の道のりを考えるとかなり遠方まで遊び歩いたことになる。甚三久の1年間の私事外出で犀川以南の記事は、これ以外に調練見物と寺院での法要のみである。さらに能見物と帰りに寄った風呂以外に郊外にも出ていない。

e）地理的特性まとめ

甚三久は主に自宅周辺の徒歩圏内で遊びを楽しんでいた。彼の住む卯辰山麓界隈が、催事が多く行われる寺院群や自然を楽しむ卯辰山、宴会を楽しむ盛り場など、遊びの場が集積していた地域のひとつであったことが一因と考えられる。これは、丸山が述べた「寺社、遊郭、飲食店などが補完的に存在している」[9] 遊び空間を利用していたことを示す。金沢の寺院群近辺の盛り場だけでも3箇所あり、その他、城下には真宗寺院も点在し、盛り場も多くあったと考えられるが、甚三久の遊びで特徴的なことは、ほとんどの場合自宅近くの盛り場を利用していたことである。当時の他の人による日記も調べることにより、日常の遊びの地理的特性がより明確になると思われる。

4．まとめ

本研究では、藩末期の町人の日記を用いて近世城下町における庶民の外出特性、特に遊びの行動特性や空間特性を分析した。主な結果を以下に示す。

①私事外出には、用事や儀礼・挨拶・入浴習慣といった必要性を伴った外出と、娯楽・飲食・参詣・買物といった必要性をあまり持たず生活に楽しみや潤いを持たせる外出がある。後者を「遊び」と定義した。

②遊び以外の私事外出の多くは、用件遂行あるいは人との付き合い上生じた個人宅への訪問が多く、現代ではあまり発生しないトリップが多い。

③年間を通した外出の特性として、遊び外出で春・秋の行楽期や天気のよい日にやや多い傾向はみられたが、明確な特徴はみられない。

④目的地が個人宅以外の娯楽や飲食では、家族や友人と連れ立っての外出が多い。

⑤1回の外出時の立寄り回数は、入浴、儀礼、買物のような目的のはっきりした外出では少ないが、用事による個人宅への立寄りは、外出ついでに立寄る場合が多い。遊び目的では、何箇所にも立寄り複数の遊びを行っている。

⑥遊びには、日常的な参詣や飲食を伴うことが多い。

⑦非日常的な遊びでは、自然・季節を楽しむ遊びと、寺社での祭り・催事を楽しむ遊び、武家社会の行事の見物などがある。

⑧遊びの目的地は、距離と川や橋など地形・社会的な境界の影響を受ける傾向がある。

⑨参詣、飲食、買物など遊びの多くは自宅近辺を外出先としており、比較的身近な場所で遊びを楽しんでいる。娯楽では遠くまで出かけることがある。

⑩寺社に日常の参詣、非日常の催しの遊びがあり、同時

表15　立寄り回数の多い外出記事

	時刻	町名	目的地	距離	同行	目的	内容
9月7日　晴、夜風雨							
1			算用場	720		仕事	仕事
2	夕方	卯辰山麓	観音院	1050	友人1名	参詣	参詣
3		卯辰山麓	市姫宮	20	友人1名	参詣	参詣
4		卯辰山	庚申塚	740	友人1名	娯楽	景色見物
5		卯辰山	一本松	550	友人1名	娯楽	景色見物
6		卯辰山麓	多門天社	320	友人1名	参詣	参詣
7		木町	小料理屋	210	友人1名	飲食	軽食、飲酒
8		愛宕町	小松屋	260	友人1名	飲食	芸者と騒ぐ
	翌2時		自宅	120			
総トリップ距離				3990 m			
5月11日　雨後曇、冷風							
1	15時	森下町	清水屋方	220		娯楽	行列見物
2		味噌蔵町		810	友人3名	娯楽	散策
3		百間堀		270	友人3名	娯楽	散策
4		本多	本多家中	380	友人3名	娯楽	散策
5		犀川上	武家屋敷前	920	友人3名	娯楽	散策
6		一文橋	ごり屋	80	友人2名	娯楽	ごり見物
7		一文橋	ごり屋大池	30		娯楽	屋形舟
8		野田寺町	草花屋	210		娯楽	草花見物
9		寺町	鍔屋	440		飲食	夕飯、飲酒
10		南町	松本屋	1360		飲食	茶菓
	0時		自宅	1130			
総トリップ距離				5850 m			

距離は各トリップの起点から終点までの直線距離を示す

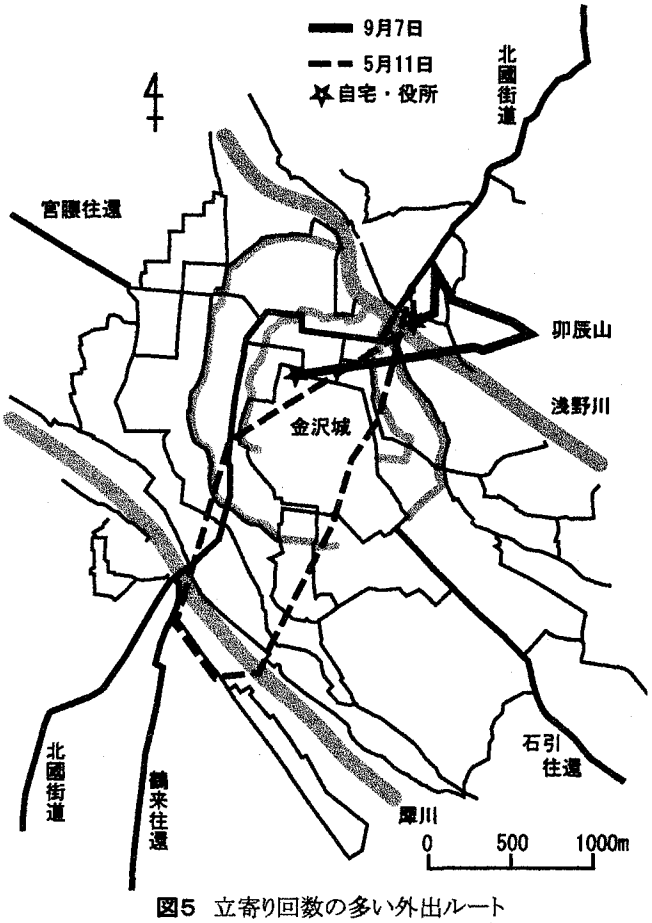

図5　立寄り回数の多い外出ルート

に周辺の飲食店などを利用し、寺社を核とした賑わいの場があった。

寺社は様々な遊びが提供された施設であり、その周辺では寺社で得られない遊びを提供し賑わい空間として成立していたといえる。青木が現代の中心市街地の訪問動機に「精神充足」を挙げていたが[34]、近世の寺社訪問がその役割を果たしていたと考えられる。現代、寺社は日常的に訪れる対象ではなくなってしまった。さらに、モータリゼイションの進展に伴い、特に非戦災都市で近世の街路網を継承している金沢では、集客力の大きな施設が郊外に移転し、総合的な遊び空間は郊外のレジャーセンター、ショッピングセンターに代わってしまった。現在の中心市街地に残る遊びは非日常的な買物・飲食と休日の催事が主体である。しかし、非日常的な遊びには集客の確実性が低く、常態的な賑わいを得ることは難しい。日常的な遊びとして近世の精神充足の核となった寺社に代わる新たな核が必要である。近年、金沢では駅前に音楽堂、都心部に美術館が建設された。また、兼六園周辺施設活性化のための検討を進めている。こうした伝統芸能・芸術・教養の場が、新たな精神充足の核となり得るのではないかと考えられる。さらに、図書館や大学のサテライト教室・生涯教育の機会を都心部で充実させることが望まれる。また、本研究では、自宅近くの盛り場をよく利用していることが示された。中心市街地の居住人口の増加策とともに、交通網の整備など中心部へのアクセスの向上も重要な課題である。

参考文献

1) 青木俊明：「中心市街地の訪問動機の分析とそれに基づく活性化方策の考察」、都市計画論文集、No.40-3、pp.643-648、2005 年
2) 藤井夕貴子、天野光一：「江戸繁華街における回遊行動～『斎藤月岑日記』を対象に～」、土木計画学研究・講演集、No.22(2)、pp.31-34、1999 年
3) 羽生冬佳：「江戸の名所の成立・成熟過程に冠する研究」、都市計画論文集、No.39-3、pp.115-120、2004 年
4) 吉田伸之、長島弘明、伊藤毅編：『江戸の広場』、東京大学出版会、pp.3-23、2005 年
5) 文献 4)、pp.25-42
6) 金沢民俗をさぐる会編著、『都市の民俗・金沢』、国書刊行会、pp.1-30、1984 年
7) 文献 6) pp.28-29
8) 川上光彦・丸山敦・永山孝一編著、『21 世紀へのプロローグ　まちづくりの戦略』、山海堂、pp.49-64、1994 年
9) 文献 8) p.53
10) 若林喜三郎編、『梅田日記』、北国出版社、1970 年
11) 文献 10) 解説 pp.11-46
12) 田川捷一編、『加越能　近世史研究必携』、北國新聞社、p.260, p.265、1997 年
13) 文献 10) p.30、解説 p.12
14) 文献 10) p.36（10 月 8 日～10 月 18 日）、pp.84-91(2 月 3 日～2 月 12 日)、pp.128-135(3 月 29 日～4 月 3 日)
15) 文献 10) p.10
16) 文献 10) p.119
17) 『古絵図探訪』（DVD 図集）、能登印刷、2002 年
18) 文献 6) p.52
19) 八田健一、『百万石太平記』、石川県図書館協会、p.91、1964 年
20) 本岡三郎、『金沢という街』、金沢実業会、p.62、1959 年
21) 文献 10) p.27
22) 田中喜男、『城下町金沢』、日本書院、pp.28-32、1966 年
23) 文献 19) pp.63-67
24) 文献 20) p.70,76-78
25) 文献 22) pp.53-56
26) 『金沢市文化財紀要 149　金沢市の寺院群民俗行事』、金沢市教育委員会、p.34、1999 年
27) 文献 26）p.45
28) 『日本海文化叢書第 1 巻、加越能寺社由来上巻』、石川県図書館協会、p.22、1975 年
29) 高室信一、『金沢・町物語』、能登印刷、p.34、1982 年
30)文献 28) p.20
31) 文献 10) p.51
32) 文献 10) p.10
33) 『金沢市史　資料編 13　寺社』、金沢市、pp.609-612、1998
34) 文献 1)、p.648

注

(1) 十村とは、文献 12) によると、「他藩の大庄屋にあたる加賀藩特有の職名」。また、番代は「十村詰番の代りに各郡より 1 人、十村詰め所に勤めた」とある。

(2) 現在でも来教寺では、毎月 10 日に般若心経転読、観音院では毎月 18 日にお勤めが行われている（文献 26)）。

(3) 文献 33)では、当時の寺院群やその他の寺社について、祭礼や開帳の催しと、その時の参詣人や出店、見世物などの賑わいの様子が記述されている。